

特集 ワイド

「この中に私もいる」

旧満州(現中国東北部)から幼児期に引き揚げてきた歌手の加藤登紀子さんは、そう思ったという。私も一目見て思った。「この中に母もいる」と。

神戸で開かれていた中国人画家、王希奇さん(62)の作品「一九四六」の巡回展を見た。縦3メートル、横20メートルの大作。敗戦翌年、中国の港・葫蘆島にたどり着いた数百人の引き揚げ者を描いている。青壮年の男性は徴兵されて現地にはおらず、多くは女性と子どもだ。や

どこかで誰かが

斉藤貞三郎

つれた顔でうつむく母親、遺骨を抱いた男装の少女、戦争への怒りを訴えるようににらむ子……。敗戦時、旧満州には150万人以上の民間人が取り残された。う

「棄民」描く大作を前に

ち17万人以上が当時のソ連軍や匪賊による襲撃や略奪、飢え、病気、自決などで亡くなったとされる。その半数近くは国策で送り出された満蒙開拓団の人たちだった。私の母が福島県の山村から家族

7人で渡ったのは既に戦況が厳しくなっていた1944年5月。生前の母の話では、敗戦後に真っ先に殺されたのは先遣隊員だった。「現地民をばかにして物や耕地を

取り上げたりしたからうらまれていた」。団員も食糧や衣類を根こそぎ奪われ、逃げ惑う中で次々と倒れた。私の祖母もその一人だ。加害者であり、被害者でもあるという二つの境遇を一身に強いら

れた日本人。王さんは、そこに戦争の愚かさや平和の尊さを見いだし、史実を後世に知ってほしいと5年半をかけて絵を完成させた。画面の中の引き揚げ者は暗い波間に漂う「棄民」のように見える。しかし、そこにいくつもの白い点があるのに気がついた。ホタルが放つ光で、帰還を目前にした希望や喜びを表現したという。ガイド役の男性は「葫蘆島までたどり着けなかった人たちの無念さや魂でもあるのでは」と話した。

記者になって35年になる。残留

孤児の方に話を聞く機会もあったが、自分の母が生きて帰国したことにどこか後ろめたさを覚え、深くかかわることができなかった。しかし、戦後77年がたち、体験を語れる人は少なくなっている。遅きに失したが、王さんと同世代で、引き揚げ2世の私にも伝えるべきことがあるのではないか。幸い、母が書き残した体験記もある。絵画の中に母や祖母の姿を思い浮かべていると、背中を押されたような気がした。

(大阪編集局)

|| 次回は10月17日